

令和4年度 教育事業等報告書



独立行政法人 国立青少年教育振興機構
 国立赤城青少年交流の家

目 次

1 青少年教育に関するモデル的事業

- ・あかぎ無限大キャンプ 2
- ・地域探究プログラム オリエンテーション合宿in赤城 4
- ・地域探究プログラム 地方ステージ 6

2 社会の要請に応える体験活動等事業

- ・親子キャンプ 秋編 8
- ・親子キャンプ 新春編 10
- ・あかぎ防災キャンプ 12
- ・幼児教育指導者のための防災研修会 14

3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

- ・あかぎつつじキャンプ(こはるび①) 16
- ・あかぎつつじキャンプ(こはるび②) 18
- ・あかぎサマーキャンプ(太田) 20

4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

- ・自然体験活動指導者(NEALリーダー養成事業) 22
- ・ボランティア養成セミナー 24
- ・利用団体のための説明会 26

5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業(交流の家実施主体事業)

- ・「さくらフェスタ」 30
- ・群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動推進事業 31
- ・「あかぎフェスタ2022」 32

6 その他

- ・地域との合同防災訓練 34

1 青少年教育に関するモデル的事業

「あかぎ無限大キャンプ」

1. 趣 旨

- (1) 7泊8日の長期自然体験活動において、協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- (2) 7泊8日の長期自然体験活動の集中的な屋外活動（外遊び）を通して、近視進行の抑制（健康の保持増進）を図る。

2. 事業の概要

(1) 期 日

- ①事前キャンプ 令和4年7月 9日（土）～10日（日）【1泊2日】
- ②本キャンプ 令和4年8月 6日（土）～13日（土）【7泊8日】
※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、8月6日（土）～8月11日（木）に日程を短縮した。
- ③事後キャンプ 令和4年9月17日（土）～18日（日）【1泊2日】

(2) 参加者

- ①参加対象 小学5～6年生24名（男子12名、女子12名）
- ②参加人数 小学5年生男子：5名 小学6年生男子：7名
小学6年生男子：6名 小学6年生女子：6名
群馬県：15名 埼玉県：2名 栃木県：1名 茨城県：2名 千葉県：1名
東京都：2名 神奈川県：1名 計24名

3. 企画運営のポイント

- (1) 本キャンプを「セカンド【獲得】」「サード【グループ】」「フォース【成長】」の3つのステージに分けて、ステージごとのねらい・活動のポイントを明確にして実施した。
- (2) 「他者の特徴を知るための時間」「活動プログラムを習得する時間」「活動前の話し合いの時間」「自分の考えをまとめる時間」「1日のふりかえりの時間」を十分に確保するために、ゆとりのあるプログラムを編成した。
- (3) 「サード【グループ】」で、グループ間の協議が活発になるように、グループの話し合いで決める活動（グループキャンプタイム）を設定した。
- (4) 「フォース【成長】」で、個人の成長を実感できるように「個人の能力で決める活動（赤城山選択登山）」を設定した。
※日程を短縮したため未実施。

4. 日 程

日程概要	プログラム	宿泊場所
7月9日(土) 事前キャンプ1日目	・開会式・自己紹介・アイスブレイク・レクリエーション ・眼の検査・野外炊事	国立赤城青少年 交流の家
7月10日(日) 事前キャンプ2日目	・赤城山登山（覚満淵～鳥居峠～長七郎山～小沼）	
8月6日(土) 1日目	・開会式 ・アイスブレイク ・チームMT①「どんなチーム旗を作ろうか？」 ・野外炊事「カレーライスづくり」・眼の検査 ・ふりかえり	国立赤城青少年 交流の家
8月7日(日) 2日目	・クラフト体験「かんな箸・マイスプーンづくり」 ・テント設営・レクリエーション「オリエンテーリング等」 ・ナイトプログラム「自然観察」 ・チームMT②「明日は何しようか？」 ・ふりかえり	国立赤城青少年 交流の家
8月8日(月) 3日目	・選択レクリエーション① ・野外炊事「バーベキュー」 ・登山MT「どの山を登ろうか？」 ・ふりかえり	国立赤城青少年 交流の家

8月9日(火) 4日目	・野外炊事「朝食づくり」 ・チームMT③「グループキャンプタイムで何をしようか？」 ・グループキャンプタイム ・ふりかえり	国立赤城青少年 交流の家
8月10日(水) 5日目	・グループキャンプタイム※テント片付け ・お別れパーティー ・ふりかえり	国立赤城青少年 交流の家
8月11日(木) 6日目	・ふりかえり ・閉会式	
9月17日(土) 事後キャンプ1日目	・開会式 ・赤城山登山 (姫百合駐車場～荒山高原～鍋割山) ・たき火 ・ふりかえり	国立赤城青少年 交流の家
9月18日(日) 事後キャンプ2日目	・レクリエーション ・色紙づくり ・眼の検査 ・閉会式 (決意表明)	

5. 主な活動内容



「アイスブレイク」



「野外炊事」



「赤城山登山」



「テント設営」



「レクリエーション」



「チーム旗づくり」



「キャンプまとめ」



「決意表明」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足24名(100%)

(2) 成果

- ①グループキャンプタイムの料理を既習の「カレーライス」「焼きそば」「朝食作り(パン)」の材料にしたことで、見通しをもって3食分の献立を立てることができていた。また、参加者の自発的な調理につながった。
- ②参加者アンケートで、「自分たちで考えて決める活動が楽しかった。」「グループのレクリエーションが楽しかった。」等の感想が見られたことから、グループで考え話し合う活動が、参加者の挑戦意欲の向上やグループへの所属感につながったと考える。
- ③本キャンプの1カ月後の保護者アンケートで、「家の手伝いを自分からするようになった。」「(自分から)〇〇してみよう。」という感想から、本キャンプのプログラムが参加者の自発的な行動につながるきっかけの一助になったと考える。
- ④本キャンプ後に、「あかぎ無限大キャンプ」で学んだことについて上毛新聞読者投稿欄に自発的に投稿した参加者がいた。
(令和4年8月27日 上毛新聞13面掲載)

(3) 課題

- ①レクリエーションや野外炊事への取り組みませ方を工夫し、グループの話し合いが、参加者にとって、より「必要感」があるものにする。
- ②キャンプ参加前を含む、参加者の健康状態の維持と把握の仕方。

担当：企画指導専門職 小林 大輔

「地域探究プログラム オリエンテーション合宿 in 赤城」

1. 趣 旨

宿泊を伴うオリエンテーション合宿を通して、探究のプロセスを体験し、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを身に付ける。

2. 事業の概要

(1) 期 日

令和4年12月26日(月)～27日(火)【1泊2日】

(2) 参加者

- ①参加対象 群馬県立沼田女子高等学校2学年生徒
- ②参加人数 17名

3. 企画運営のポイント

- (1) 活動の目的や達成目標を明確にし探究の学びのプロセスを用いて、指導計画とワークシートを作成する。
- (2) フィールドワーク先を多機能型事業所「SONATARUE」に設定し、医療法人大誠会グループの協力を得ることで、充実した体験活動ができるようにする。
- (3) オリエンテーション合宿の課題を「SONATARUE 活性化プランをつくる」に設定し、沼田女子高校の「総合的な探究の時間」の教育課程と関連させ、本合宿の成果を学校で生かすことができるようにする。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
12月26日 (月)	フィールドワーク① 「地域の魅力を発見」 講師：田辺 祐己氏 (医療法人大誠会) 真下 潔氏 小林 若葉氏 角田 指導員 (SONATARUE)	講義・演習① 「地域理解」	講義・演習② 「課題解決の基礎」
12月27日 (火)	フィールドワーク② 「地域課題の探究」 講師：田辺 祐己氏 (医療法人大誠会) 講義・演習③ 「地域課題の探究」	講義・演習③ 「地域課題の探究」 発表 ふりかえり	

5. 主な活動内容



フィールドワーク①「地域の魅力を発見」



講義・演習①「地域理解」



講義・演習②「課題解決の基礎」



フィールドワーク②「地域課題の探究」



講義・演習③「地域課題の探究」



発表

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足12名(70.6%) やや満足5名(29.4%) やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・自分自身を成長させることができ、学校では学べないことを学べた、充実した2日間だった。
- ・グループのみんなで考えることで一人では気づけない発見ができて楽しかった。
- ・みんなで協力して発表の準備や発表をすることで、人前の発表が苦手な私でも自信をもって良い発表ができた。
- ・他の班の発表を聞いて、こんな視点があるのかと驚かされたので、視野を広く物事を見る力をつけたいと思った。
- ・体験活動がコロナの影響で少ない中、参加して課題発見・解決能力を伸ばすことができた。
- ・探究活動の仕方を深く知ることができた。他人事と思わず、自分のことと理解し自分から行動していきたいと思った。考えるだけでなく実行までたどりつけるかがカギだと思った。
- ・こんなにも1つのことに集中して過ごした2日間はこれまでにないので、すごく貴重な体験をすることができた。障がいの方と関わっていくことが「貴重」ではなく「普通」のことになれば良いと思った。将来の夢に向けて日々努力していきたい。

(3) 成果

- ①参加者から「ステップごとに組まれていてわかりやすかった」「短い時間の中で課題をみつけて、解決方法を探してというのが厳しいかなと思っていたけど、班で協力してアイデアを出し合うことで、少し凝ったものができてよかった」「探究活動の仕方を深く知ることができた」などの意見があることから、各探究のプロセスごとに活動の目的を明確にし、ワークシートを作成したことは、情報の整理や分析、アイデア出しや発表方法を考えるための手段として有効であった。
- ②参加者から「1泊2日の中で、コロナ禍にできなかったことをたくさん体験でき、地域について考える良いきっかけとなった」「地域について考えられてよかった」などの意見があることから、地域についての理解を深める上でフィールドワークは有効であり、自分の地域に目を向けるきっかけとなった。多機能型事業所でフィールドワークを行ったことで、学校の教育課程とも関連付けることができた。

(4) 課題

- ①新型コロナウイルス感染症の影響もあり日程調整と参加者集めが難航した。引き続き連携校と協議しながら日程調整をし、積極的に学校にも足を運ぶとともに今年度の参加者も巻き込みながら広報を行っていききたい。

担当:企画指導専門職 竹内 正則

「地方ステージ in 国立赤城青少年交流の家」

1. 趣 旨

各自が行った実践活動について発表するプレゼンテーション活動を通して、思考力や判断力、表現力を養うとともに、他者の発表や自身の発表への講評を聞くことで、あらたな気づきや学びの機会とする。また、出場者が提出した報告書及びプレゼンテーションについて審査し、全国ステージに出場する代表者を選出する。

2. 事業の概要

(1) 期日

令和5年1月21日（土）～22日（日）

(2) 参加者

14名（個人部門：4名 グループ部門：3グループ 10名）

3. 企画運営のポイント

- (1) 他者の意見を取り入れ、新たな気づき生まれやすくなるよう「フィードバック用紙」を用意し「ふりかえり」の時間を設けることで、より充実した学びの機会となるようにする。
- (2) 参加者交流の時間も設け、学びを広げたり深めたりするきっかけとする。
- (3) 集合開催できない場合や現地に來ることができない参加者がいた場合にも対応できるようにオンライン接続の準備をする。
- (4) 4施設での持ち回り開催であることから、次年度の反省を生かし来年度にもつなげられるよう、Teams も活用し他施設職員と連携協力し事業運営する。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
1月21日 (土)		開会式 オリエンテーション リハーサル・動作確認 (評価委員打合せ) グループ発表・講評	参加者交流会
1月22日 (日)	朝のつどい リハーサル・動作確認 (評価委員打合せ) 個人発表・個表 ふりかえり	表彰式 閉会式	

5. 主な活動内容



「開会式」



「グループ発表」



「参加者交流会」



「朝のつどい」



「個人発表」



「ふりかえり」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足14名(100%) やや満足0名 やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・地域を活性化するためには、どうしたらよいのかという問題について、深く考えることができ、良い経験になりました。
- ・自分の気づいていないことや課題の大きさもアドバイスをいただけて、よりよい活動を考えながら頑張ろうと思います。
- ・この活動は、ここからが本番だということを再認識させてもらえました。
- ・他の人から見た、貴重な評価を聞くことができ、良かった点や改善すべき点を見つけることができました。
- ・県外の高校生の取り組みや、大変だったこと、色々なことを共有できて貴重な時間でした。

(3) 成果

- ①参加者から「自分の活動を人に伝えたり、感想をもらえたりして、また新たに頑張ろうという気持ちが強まりました。」「他の学校の話聞くことで、人それぞれの学びや考えを知ることができ良い経験になりました。」「他の高校生の発表を聞き、ヒントになったこともあり、もっともっとできることがあるのではと様々なことを考えられました。」などの声もあり他者からの意見も受け、学びを深めたり広げたりしている様子が見受けられた。
- ②オンライン接続したことで、当日参加できなかった参加者が自分のグループの発表をオンラインで視聴することができた。
- ③Teamsも活用し他施設職員と積極的に情報交換できた。また、当日の事業運営にも協力してもらうことで各施設職員が当事者意識をもって事業運営に取り組むことができた。

(4) 課題

- ①より多くの高校生が地方ステージに参加できるよう引き続き計画的にオリエンテーション合宿を進めていく必要がある。
- ②高校生の活動をより適切に評価できるよう実践報告書の内容を見直していく必要がある。

担当：企画指導専門職 竹内 正則

2 社会の要請に応える体験活動等事業

「親子キャンプ 秋編」

～ササビーと遊ぼう～

1. 趣 旨

「冒険と創造の森を活用した運動プログラムの開発委員会」で開発した、「幼児期の遊びを中心とした運動プログラム」を幼児の発達段階に応じ、親子で実施する。また、親子でハイキング等野外活動を通じて、自然体験の楽しさに触れるとともに、親子の交流を深める。絵本読み聞かせでは、絵本の世界に触れることで、豊かな心の育成を図る。

2. 事業の概要

(1) 期 日

令和4年9月24日(土)～25日(日)【1泊2日】

(2) 参加者

- ①参加対象 幼児(年中、年長)とその保護者 ※兄弟姉妹がいる場合も可
- ②参加人数 29名(9家族)

3. 企画運営のポイント

- (1) 運動遊びでは、「幼児期の遊びを中心とした運動プログラム」を取り入れて、親子で一緒に体を動かして遊ぶ。
- (2) 絵本専門士による絵本読み聞かせでは、子供の豊かな心を育成する。また、絵本の紹介や読み聞かせのコツを伝え、家庭での読み聞かせの参考となるようにする。
- (3) 「所外活動(赤城自然園散策)」では、親子で一緒に自然を感じながら、親子の交流を深める機会を設ける。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
9月 24日 (土)		開会式 運動遊び 絵本読み聞かせ	焚き火(自由参加)
9月 25日 (日)	所外活動 (赤城自然園散策)	閉会式	

5. 主な活動内容



「運動遊び」



「運動遊び」



「絵本読み聞かせ」



「焚き火」



「赤城自然園散策」



「赤城自然園散策」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足8家族(89%) やや満足0家族 やや不満1家族 不満0家族

(2) 参加者の声

- ・子供達が楽しく遊んでいる姿が見ることができてよかった。
- ・いっぱい身体を動かしてたくさん色々なことができたので、また参加したい。
- ・子供達は『これ読んでみたい』と興味をもっていた。
- ・子供も大人も充分楽しめるプログラムだった。
- ・日頃、火を扱うことが子供は少ないので、とても良い経験になったと思います。

(3) 成果

- ①運動遊びでは、元気いっぱい遊ぶ子供の姿や親子で楽しそうに遊ぶ姿が多く見られたことからプログラムの内容は良かったと考えられる。
- ②親子で楽しそうにマシュマロを焼いていた。焚き火を囲んで、大人同士、子供同士の家族を超えた交流が自然に生まれた。
- ③赤城自然園では、交流の家から持参したボールやフラフープなどを子供達が上手に使って遊び、ボランティアも交えて、家族で楽しく交流していた。

(4) 課題

- ①まえばし赤城山ヒルクライム大会の交通規制のため、赤城山ハイキングを赤城自然園散策に変更した。周辺イベントに注意して開催日やプログラムを企画する。
- ②天候によるプログラム変更で時間に余裕が生じた。手遊びやゲームなど隙間時間を埋める手段を準備し、柔軟な対応ができるようにする。
- ③絵本の紹介や読み聞かせのコツなど大人向けの話を親子で一緒に長時間聞くのは難しかった。子供達の様子を見ながら時間短縮することや資料配布による紹介のみにすることなども考えて、講師と打合せをしておく。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥

「親子キャンプ 新春編」

1. 趣 旨

日本における「書」を活用した活動を通して、日本の伝統と文化に触れ合いながら親子の交流を深める。

2. 事業の概要

(1) 期 日

令和5年1月7日（土）～8日（日）【1泊2日】

(2) 参加者

- ①参加対象 小学校3・4年生とその保護者 ※兄弟姉妹がいる場合も可
- ②参加人数56名（21家族）

3. 企画運営のポイント

- (1)「書道パフォーマンス」、「書初めにチャレンジしてみよう」、「書を楽しもう」では、「見る」、「体験する」ことを通して、日本の伝統文化に触れることを目的としたプログラムを導入する。
- (2)「遊びリンピックをしよう」では、親子が様々な種目に取り組みながら、親子の交流を深める機会を設ける。
- (3)「かまどで焼き餅をしよう」では、日本の伝統的行事の正月を体験できるような活動ができるようにする。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
1月 7日 (土)	/	開会式 書道パフォーマンス 書初めにチャレンジしてみよう 書を楽しもう	遊びリンピックをしよう
1月 8日 (日)	かまどで焼き餅をしよう 閉会式	/	/

5. 主な活動内容



「書道パフォーマンス」



「書道パフォーマンス(参加型)」



「書初めにチャレンジしてみよう」



「書を楽しもう」



「遊びリンピックをしよう」



「かまどで焼き餅をしよう」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足 21 家族 (100%) やや満足 0 家族 やや不満 0 家族 不満 0 家族

(2) 参加者の声

- ・初めて、書道のパフォーマンスを生で見ることができてよかった。
- ・高校生がお手本を書いてくれたので、とてもよかった。
- ・家と違い、集中して取り組めてよかった。
- ・遊びリンピックは子供も大人も夢中になって取り組めた。
- ・焼き餅ではいろいろな味があり、おいしかった。子供に火の怖さを教えられた。

(3) 成果

- ①書道パフォーマンスは参加型にしたことで、参加している児童も作品を作ることができ、貴重な体験になった。
- ②書初めでは、高校生が手本を書き、指導してくれたことで日本の伝統である書に親しむことにつながった。また、保護者対象のプログラムを企画することで、保護者も書に親しむことができた。
- ③遊びリンピックでは、ボランティアが主体となり企画運営を行った。参加者からは、子供に優しく接してくれて、安全な活動ができるよう見守ってくれたなど、肯定的な意見が多かった。

(4) 課題

- ①全体的に時間が押してしまい、入浴の時間や休憩時間が十分とれなかった。書道パフォーマンス、書初めの進め方について、高校側と十分に打合せを行う必要がある。
- ②家族単位での動きが多かったため、参加者同士が交流するようなプログラムを設定してもよい。

担当：企画指導専門職 中山 太平

「あかぎ防災キャンプ」

1. 趣 旨

次代を担う人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指し、これからの防災・減災の担い手である中学生を中心とした防災キャンプを開催し、防災ジュニアリーダーを育成する。

2. 事業の概要

(1) 期 日

令和4年8月19日（金）～21日（日）【2泊3日】

(2) 参加者

中学1、2年生 生徒10名（男子6名、女子4名）

3. 企画運営のポイント

- (1) あかぎ防災キャンプの目標を「防災・減災の担い手となる防災ジュニアリーダーの育成」に設定し、キャンプでの学びを学校や地域社会で活用する。
- (2) 最初の防災講話で群馬大学大学院金井教授から中学生として身に付けてほしいことを伝え、キャンプにおける学びの目標を明確に設定する。
- (3) 学びごとに振り返りを行い、グループワークを取り入れ、子供たち同士で考えを共有し、「中学生の自分たちができること」を発表する。
- (4) 前橋市防災危機管理課の協力をもとに、意欲的に学び、充実した体験活動ができるようにする。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
8月19日 (金)	/	【講義】 「防災講話」 【訓練】 「災害体験訓練」 【実習】 「避難所開設」	【実習】 「防災クラフト」
8月20日 (土)	【実習】 風水害プログラム 【野外炊事】 「防災カレー」	【講義】 「防災講話」 【実習】 「HUG 風水害編」	【グループワーク】 「避難所での自分たちの役割を考えよう」
8月21日 (日)	「発表会」 「ふりかえり」	/	/

5. 主な活動内容



【講義】「防災講話」



【訓練・実習】「地震体験訓練」



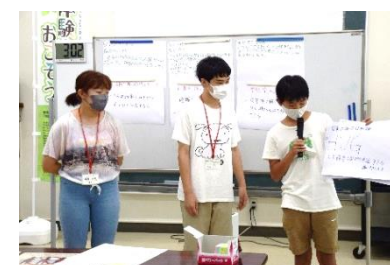
【実習】「防災クラフト」



【講義】「風水害プログラム」



【実習】「HUG 風水害編」



「発表会」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足8名(80%) やや満足2名(20%) やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・僕たちができる防災などを知ることができた。また、仲間と協力する大切さを学ぶことができた。
- ・昨年に引き続き今回2回目の参加であったが、プログラムの内容も異なり防災について楽しく学べた。他のイベントも参加してみたい。
- ・実践的な内容が多く、いろいろな体験ができてとてもよかった。

(3) 成果

- ①金井教授の防災講話では、身に付けてほしいこととして「知識を身に付ける」、「自ら判断し、行動することができる主体性」、「他者を思いやる心とみんなで協力すること」が示された。キャンプでの学びの目標が明確になった。
- ②「このキャンプで、僕達ができる防災などを知れたり、仲間と協力する大切さなどを知れたりしました。」という意見から、避難所開設や段ボールベッドの組み立て、テント設営、土嚢づくり、HUGでの避難所運営の仕方を学んだことが防災についての知識や技術の習得に結びついていた。
- ③閉会式では「普段の生活の中で、他人を思いやることができることは、バスでお年寄りに席を譲ることです。」という宣言があり、キャンプでの学びを家庭に戻ってからも活用しようとしていた。

(4) 課題

- ①夜の活動の開始予定時刻が遅めであり、さらに活動も長引いてしまったため、1、2日目の終了が21:00を大幅に過ぎてしまった。遅くとも20:00までには活動を終了し、就寝準備の時間を十分に確保できるようにする。
- ②グループで発表内容をまとめることに苦労した。グループワークでは振り返りと共有を行い、発表は一人ずつにするなど、参加者の実態に応じた工夫をする。
- ③金井教授による講話と発表会の講評が最大限に活かされるように、企画の段階から指導助言をうけながら、効果的なプログラム作りをする。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥

「幼児教育指導者のための防災研修会」

1. 趣 旨

前橋市国土強靱化地域計画の重点化施策の一つである「防災啓発・防災教育の推進」を目指し、保育現場における防災啓発及び防災教育を幼稚園教諭等の幼児教育指導者に対し実施しその充実を図る。また、実施にあたっては、BCP（事業継続計画）を考慮し実施する。

2. 事業の概要

(1) 期 日

令和4年9月3日（土）～9月4日（日）【1泊2日】

(2) 参加者

- ①参加対象 幼稚園教諭及び認定こども園等の幼児教育指導者
- ②参加人数 17名

3. 企画運営のポイント

- (1) 実施にあたっては、一般社団法人群馬県私立幼稚園・認定こども園協会と連携・協力し、特に、参加者募集については、協会を通じて行う。
- (2) 防災の専門家である群馬大学大学院の金井昌信教授と連携、企画段階から内容の検討を金井先生と行い、BCP（事業継続計画）を考慮した内容とする。
- (3) 新型コロナウイルス感染症対策として、受付時・就寝前・起床時の検温、手洗い、マスクの着用など、基本的な感染症対策の徹底を図り、安心して研修に取り組める環境とする。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
9月3日 (土)		【開講式】 【講義・演習】 「防災研修Ⅰ」 講師：群馬大学大学院 教授 金井昌信 氏	【情報交換】
9月4日 (日)	【講義・演習】 「防災研修Ⅱ」 講師：群馬大学大学院 教授 金井昌信 氏	【説明】 「ササビー広場で 遊ぼう！」 説明：国立赤城青少年 交流の家職員 福岡公平 【閉講式】	

5. 主な活動内容



「防災研修 I・II」



「情報交換」



「ササビー広場で遊ぼう」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

事業全体：満足15名（100%）

(2) 参加者の声

- ・普段から防災について様々な視点から考えておく必要があると思った。特に、避難後の対応について考えたことがなかったので、園全体で共有して考えていかなければならないと実感した。
- ・防災について今まで教えられてきたお手本だけでなく、現実に見合った対応がいくつも紹介されていてよかった。
- ・防災に関する基礎的な情報（国）を基に、説明していたので分かりやすかった。
- ・生活を一変させてしまう災害は発生してから対応するのでは遅いので、いざ災害が発生した時に適切に対応できるように研修内容を生かしたい。
- ・いつ自分たちの身に起こるか分からない災害について改めて園や家庭でも見直していく必要がある。

(3) 成果

- ①今年度、新規事業として実施した事業であったが、一般社団法人群馬県私立幼稚園・認定こども園協会及び群馬大学大学院金井教授との連携により、参加者からの満足度も高く、中身の濃い充実した研修を実施することができた。
- ②研修会の後半では、「ササビー広場で遊ぼう！」という時間を設け、当施設の幼児向けの運動遊びの場を紹介することで、研修支援の利用につなげる広報をすることができた。

(4) 課題

- ①事業実施にあたり、日程候補日や対象の設定、広報、参加者の募集等、連携協力団体である一般社団法人群馬県私立幼稚園・認定こども園協会を通じて行ったが、募集人数を下回る参加者となった。来年度以降の実施にあたっては、日程や対象の設定を含め、入念な事前打ち合わせを行う必要がある。

担当：主幹兼事業推進係長 福岡 公平

3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

「あかぎつつじキャンプ（こはるび①）」

～児童養護施設対象事業～

1. 趣 旨

国立青少年教育振興機構の各施設において、児童養護施設の子供を対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供達の基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。また、子供同士のふれあいや職員との交流を深め、自然体験や食育、ものづくり体験などを行うことにより、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

2. 事業の概要

(1) 期 日 令和4年5月4日（水・祝）～5月5日（木・祝）【1泊2日】

(2) 参加者 児童養護施設「こはるび」 32名

①引率者 11名

②子 供 21名（幼児2名、小学生12名、中学生6名、高校生1名）

3. 企画運営のポイント

- (1) 基本的な生活習慣の確立や心身の健康増進を意識し、体験を中心に据えたプログラムを構成した。
- (2) 子供達がより主体的に活動できるように、引率者と連携しながら班を編成した。
- (3) 「自立」「心身の健康増進」が事業の目的であることをボランティアを含めたスタッフ全員で共通理解した上で、「どのように関わるべきか」を意識しながら事業の運営を進めた。

4. 日 程

	午 前	午 後
5月4日 (水・祝)	受付 始まりの会 アイスブレイク オリエンテーション 昼食	赤城の森を探検しよう！ オリジナルスプーンを作ろう！ 夕食 火を囲んで星空を見よう！ 入浴 就寝
5月5日 (木・祝)	朝のつどい 朝食 遊びリンピックをしよう！ 野外炊事をしよう！	お別れの会 おわりの会 解散

5. 主な活動内容

「赤城の森を探検しよう！」 「オリジナルスプーンを作ろう！」 「火を囲んで星空を見よう！」

「朝のつどい」 「遊びリンピックをしよう！」 「野外炊事をしよう！」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：32人（100%） やや満足：0人（0%）
やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）

(2) 参加者の声

- ・多くの自然があり、全部が楽しかった。（子供）
- ・ササビー広場のロープ遊びが楽しかった。（子供）
- ・自分で作ったスプーンを使って、みんなで作ったカレーライスを食べることができた。自分のことは自分でやったので、すごく楽しかった（子供）
- ・普段の生活では見られない子供の興味のポイントを見つけることができた。（引率者）
- ・児童が主体となって挑戦をすることができ、貴重な体験となった。（引率者）
- ・自分からコミュニケーションをとることが少ない子ども、積極的に話している場合が見られてよかった。（引率者）
- ・オリエンテーリングでは男女関係なく関わることができ、絆づくりに適していたプログラム内容だった。（引率者）

(3) 成果

- ①参加した子供から「自分で作ったスプーンで食べたり、いろいろなことを最初から一人で行ったりしたので、すごく楽しかった。」、指導者から「施設での生活よりも、宿泊・食事・掃除・片づけ等については厳しいと感じたが、良い経験になった。」などの感想があることから、自立を支援するプログラムを実施できたと考える。
- ②参加した引率者から「児童が主体となって挑戦をすることができ、貴重な体験をすることが出来た。」などの感想があることから、引率者と連携してプログラムによって班編成と活動内容を工夫できたことは子供たちの主体性を引き出すのに有効であったと考える。

(4) 課題

- ①参加者が多く年齢層も幅広く、選択プログラムも取り入れたことから、ボランティアの負担が多くなってしまったが大いに活躍してくれた。
- ②今回のように、幼児が参加する場合は活動時間に十分にゆとりをもたせる必要がある。

担当：企画指導専門職 竹内 正則

「あかぎつつじキャンプ（こはるび②）」

～児童養護施設対象事業～

1. 趣 旨

国立青少年教育振興機構の各施設において、児童養護施設の子供を対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供達の基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。また、子供同士のふれあいや職員との交流を深め、自然体験や食育、ものづくり体験などを行うことにより、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

2. 事業の概要

(1) 期 日 令和4年11月26日(土)～11月27日(日)【1泊2日】

(2) 参加者 児童養護施設「こはるび」 26名

①引率者 7名

②子 供 19名(小学生16名、中学生3名)

3. 企画運営のポイント

- (1) 基本的な生活習慣の確立や心身の健康増進を意識し、体験を中心に据えたプログラムを構成した。
- (2) 子供が主体的に活動できるように、施設が企画したプログラムを導入した。
- (3) 「自立」「心身の健康増進」が事業の目的であることをボランティアを含めたスタッフ全員で共通理解した上で、「どのように関わるべきか」を意識しながら事業の運営を進めた。

4. 日 程

	午 前	午 後
11月 26日 (土)	受付 始まりの会 アイスブレイク オリエンテーション 昼食	赤城の森を探検しよう (アドベンチャーラリー・ネイチャービンゴ) オリジナルフォトフレームを作ろう 夕食 火を囲んで星空を見よう・ナイトウォーク 入浴 就寝
11月 27日 (日)	朝のつどい 朝食 レクリエーション すいとんを作ろう	お別れの会 おわりの会 解散

5. 主な活動内容

「開会式・アイスブレイク」

「アドベンチャーラリー」

「ネイチャービンゴ」

「火を囲んで星空を見よう！」

「レクリエーション」

「すいとんを作ろう！」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：26人（96％） やや満足：0人（0％）

やや不満：0人（0％） 不満：1人（4％）

(2) 参加者の声

- ・できないこと苦手なことをお互い補い、協力することができた。（子供）
- ・仲間との絆の深まりや自分の個性を出せた。（子供）
- ・普段は体験できないことをたくさん体験した。（子供）
- ・ナイトウォークでは夜の森や動物の鳴き声が聞けた（子供）
- ・子どもが主体的となって活動できた。（引率者）
- ・高齢児が年下児童を気に掛ける姿が見られた。（引率者）
- ・野外炊事では一人一人が役割を考え、行動できた。レクでは職員と子どもが一体となって楽しめた。（引率者）

(3) 成果

- ①同施設で2回目の自立支援キャンプということで、事前に施設職員と打ち合わせをした際、プログラムの1つの企画を依頼した。子供たちが話し合い、決めたプログラムに参加することで、主体性や自立の一助になったと考えられる。参加した子供からは、「みんなと協力して計画を立てることができた。」、引率者から「子供が主体となって活動できるプログラムがたくさんあった。」などの感想があることから、1回目の自立支援キャンプのプログラムを生かした、自立を支援するプログラム設定・実施ができたと考える。
- ②引率者から「新しいプログラムや主体的に活動できるプログラムだった。」などの感想があることから、事前の打ち合わせを通し、プログラム設定のための連絡を十分にとったことが参加者の自立支援につながったと考えられる。

(4) 課題

- ①プログラム間の余裕がない場面も見られたのでゆとりを持った時間配分が必要となる。また、参加者の年齢に合わせたプログラム設定が必要となる。
- ②ふりかえりの時間が十分に確保できなかった。また、年下児童にとって分かりにくいアンケート内容があったため、アンケート内容の工夫・説明・補助が必要である。

担当：企画指導専門職 中山 太平

「あかぎサマーキャンプ」

～ひとり親家庭対象事業～

1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家において、ひとり親家庭の子供たちを対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。自然体験や食育、工作体験などの活動をする中で、子供たち同士のふれあいを深めたり、保護者同士の交流を図ったりする活動を通して、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

2. 事業の概要

(1) 期 日 令和4年6月11日(土) ～ 6月12日(日)【1泊2日】

(2) 参加者

太田市母子会 15名(4家族10名、事務局5名)

3. 企画運営のポイント

- (1) 基本的な生活習慣の確立や心身の健康増進を意識し、体験を中心に据えたプログラムを構成した。
- (2) 子供たちの「野外炊事(カレーライス作り)」と同じ時間に、保護者の「ワクワク子育てトークン」を設定することで、母子分離の機会とした。
- (3) 「自立」「心身の健康増進」が事業の目的であることをスタッフ全員(ボランティア含む)で共通理解した上で、「どのように関わるべきか」を意識しながら事業の運営を進めた。

4. 日 程

	午 前	午 後
6月11日 (土)	受付 開会式 昼食	館内フォトラリー (子) 野外炊事「カレーライス作り」 (親) ワクワク子育てトークン たき火体験 入浴 就寝
6月12日 (日)	朝のつどい 朝食 退所点検 赤城山登山	赤城山登山 閉会式 解散

5. 主な活動内容

「開会式」

「館内フォトラリー」

「野外炊事」

「ワクワク子育てトーク」

「たき火」

「赤城山登山」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足：15人（100%） やや満足：0人（0%）

やや不満：0人（0%） 不満：0人（0%）

(2) 参加者の声

- ・子供だけでカレーをつくる大変さがわかったので、家の手伝いをしていきたい。（子供）
- ・災害があっても対応できそう。（子供）
- ・初めはみんなとあまり話せなかったけど、フォトラリーやカレーづくりをしてたくさん話せて楽しかった。（子供）
- ・異年齢の子供たちの交流ができてとてもよかった。（保護者）
- ・子供はやれば何でもできる、親は見守るだけでいい。（保護者）
- ・子供たちだけでカレーライスを作り、それを大人達が美味しそうに食べるのを見てとても嬉しそうだった。（保護者）

(3) 成果

- ①参加した子供から「お母さんの凄さ、有難さを知ることができた。」「家の手伝いしていきたい。」などの感想があることから、自立を支援するプログラムを実施できたと考える。
- ②参加した保護者から「初めての登山で雨が降り、風が吹き、大変な中をやりきった自分はすごいと誇らしそうだった。」「子供だけで、館内フォトラリーのポイントを全部見つけたことが達成感に繋がった（全てにおいて自分でできたという自信は自身の成長の大きな糧になった）」などの感想があることから、子供たちの主体性を引き出すのに有効であったと考える。
- ③事務局から「次年度以降も施設を利用したい。」という感想から、本所と事務局の連携が密にとれていたと考える。

(4) 課題

- ①連携先事務局との連携をより深め、親子で協力するプログラムと母子分離を図るプログラムのバランスを調整し、よりよいプログラムをデザインしていきたい。

担当：企画指導専門職 杉山 直弥

4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

「自然体験活動指導者（NEALリーダー）養成事業」

1. 趣旨

ボランティア養成セミナーの受講者向けのスキルアップ講習として、楽しく安全に活動を指導するための自然体験活動指導者（NEALリーダー）を養成する。

2. 事業の概要

(1) 期 日 令和4年6月25日（土）～6月26日（日）【1泊2日】

(2) 参加者

- ①参加対象 ボランティア養成セミナー受講者
- ②参加人数 21名（申込27名、キャンセル6名）
- ③参加者の内訳 高校生1名、大学生11名、社会人9名（職員4名）
- ④修了者数 21名

3. 企画運営のポイント

- (1) ボランティア養成セミナー直後で、ボランティア活動や自然体験活動への活動意欲に溢れている時期に開催することで、参加者の確保を図った。
- (2) ボランティア養成セミナーからのスキルアップという位置づけで、指導者として必要な知識や技能を座学だけではなく、実践を通して学べるようにした。
- (3) 演習や実技において、参加者同士で話し合ったり、関わったりし、交流を深め、相互学習する時間を意図的に設けた。
- (4) 新型コロナウイルス感染症対策として、受付時・就寝前・起床時の検温、手洗い、マスクの着用など、基本的な感染症対策の徹底を図り、安心して研修に取り組める環境とした。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
6月25日 (土)	開講式 説明「NEAL制度ガイダンス」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 福岡公平 実技「自然体験活動の技術」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 福岡公平・ 竹内正則	講義「対象者理解」 講師：群馬大学 准教授 大島みずき 講義・演習「自然体験活動の 指導」 講師：大東文化大学 教授 中村正雄	実技「自然体験活動の技術」 講師：菅原遊
6月26日 (日)	講義・演習「自然体験活動の特質」 講師：菅原遊	説明「NEAL制度ガイダンス」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 福岡公平 認定試験 閉講式	

5. 主な活動内容



「自然体験活動の技術」



「対象者理解」



「自然体験活動の指導」



「自然体験活動の技術」



「自然体験活動の特質」



6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

事業全体：満足20名（95%）、やや満足1名（5%）

(2) 参加者の声

- ・今回の講習を通して、自然との関わり方を実践を通して学んだ。自然は様々な場所にあり、様々な活動があった。保育士を目指しているため、子供との関わりの中で、自然体験活動をたくさん取り入れ、一人一人に合った対応をしていきたい。
- ・前回のボランティア養成セミナーでは、参加者としての意識しかなかったが、今回は、指導者としての立場を経験することが多々あり、そのことで、違う視点から自然体験活動について考えることができた。

(3) 成果

- ①高校生から社会人まで、多様な所属からなる参加者が集まった。ボランティア養成セミナー実施後に、そのスキルアップ講習としての位置づけで実施することの成果が得られた。また、各科目終了後、参加者同士が講義を振り返りながら話し合う時間を意図的に取り入れることで、相互に学び合う姿勢が見られた。
- ②NEAL 演習生3名がスタッフとして携わった。運営としての役割だけに留まらず、NEAL 有資格者の先輩として、参加者と積極的にコミュニケーションをとっていただいた。このことで、参加者たちが、具体的に指導者像を描くことができた。

(4) 課題

- ①参加者から、持ち物の詳細が知りたかった旨の感想が聞かれた。屋外での実習が予定され、野外活動に適した服装を持参するよう二次案内には記載しているが、今後は、実習・実技内容の詳細明記や、虫よけ、帽子といった野外活動に適した細かな物品の明記など、自然体験活動に不慣れな参加者も多く参加することを想定した案内をする必要がある。
- ②NEAL 事業については専門性の高い講師陣を迎える必要がある。今回の講師は昨年度と同様の講師陣であり、参加者から非常に高い満足度を得ることができた。これまでの講師に囚われることなく、講師候補者のリストアップを行い、質の高い事業実施に努める必要がある。

担当：主幹兼事業推進係長 福岡公平
企画指導専門職 竹内正則

「ボランティア養成セミナー」

1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家の自然環境を活かした様々な体験活動や学習を通して、青少年教育施設における子供たちの体験活動を支えるボランティアとしての必要な知識・技術について研修する。

2. 事業の概要

(1) 期 日

令和4年5月28日(土)～5月29日(日)【1泊2日】

(2) 参加者

①参加対象 高校生以上

②参加人数 44名(応募45名 キャンセル1名)

③参加者の内訳 高校生13名、大学生19名、社会人12名(職員4名)

3. 企画運営のポイント

- (1) ボランティア活動を行う上で、必要な知識や技能を座学だけではなく、体験を通して学べるように計画した。
- (2) 法人ボランティアとして活動してきた先輩ボランティアが、自らの体験談を発表したり、プログラムの一部を担ったりすることで、ボランティア活動について具体的なイメージを持たせるとともに、より身近なものとしてとらえられるようにした。
- (3) 新型コロナウイルス感染症対策として、受付時・就寝前・起床時の検温、手洗い、マスクの着用など、基本的な感染症対策の徹底を図り、安心して研修に取り組める環境とした。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
5月28日 (土)	開会行事 演習「ボランティア活動の技術」 (アイスブレイクの実際) 講師：国立赤城青少年交流の家 竹内 正則 法人ボランティア 吉池 涼香 根岸 咲代子 講義「青少年教育施設の現状と運営」 講師：国立赤城青少年交流の家 次長 齊藤 裕徳	講義「青少年教育」 講師：共愛学園前橋国際大学 教授 奥田 雄一郎 氏 演習「ボランティア活動の技術」 (野外炊事指導) 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 竹内 正則・福岡 公平	説明「青少年教育施設におけるボランティア活動」 「赤城のボランティア活動」 講師：法人ボランティア 吉池 涼香 越澤 舞季 根岸 咲代子
5月29日 (日)	講義「救命救急法」 講師：前橋市消防局北消防署 白川分署 署員 講義「ボランティア活動の意義」 講師：文教大学 准教授 青山 鉄兵 氏	説明「法人ボランティア登録制度」 講師：国立赤城青少年交流の家 職員 竹内 正則・福岡 公平	/

5. 主な活動内容



「アイスブレイクの実際」



「青少年教育施設の現状と運営」



「青少年教育」



「赤城のボランティア活動」



「救命救急法」



「ボランティア活動の意義」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足41名(93%)、やや満足3名(7%)

(2) 参加者の声

- ・一気に自分の世界が広がった気がした。
- ・参加したのは受動的な動機であったが、2日間を通じて、参加してよかったと思えるようになった。
- ・2日間で新しいことに挑戦することの楽しさを実感した。
- ・実際にボランティア活動のことを考えて学ぶことは新鮮だった。
- ・多くの人と同じ目的をもって学ぶ機会がもててよかった。

(3) 成果

- ①定員を超える応募があり、高校生、大学生、社会人の幅広い世代にボランティアとしての必要な知識や技術について研修する機会を提供することが出来た。
- ②例年より法人ボランティアが活躍する機会を増やしたことで、参加した法人ボランティアの意識が高まるとともに、参加者がボランティアを身近に感じる事が出来た。

(4) 課題

- ①感染症対策について、安心と感じられるレベルに個人差があるので、こちらの対策を確実に伝え、不安のある参加者がいれば個別に対応することが必要であった。
- ②群馬県内の学生の参加をより増やしていくために、コロナ禍ではあるが、来年度に向けて、早期から県内大学等と連携を図りながら広報計画を立てていきたい。

担当：企画指導専門職 竹内 正則
主幹兼事業推進係長 福岡 公平

「第1回・第2回利用団体のための説明会」

1. 趣旨

国立赤城青少年交流の家を利用する団体の引率者が、施設の利用方法や各活動プログラムの内容を理解するとともに、実際にプログラムの一部を体験する。

2. 事業の概要

(1) 期日

第1回：令和4年4月24日（日）、25日（月）

第2回：令和4年5月6日（金）、7日（土）

(2) 参加者

①参加対象

第1回：令和4年度利用団体（5～7月）の引率者

第2回：令和4年度利用団体（7～9月）の引率者

②参加人数と内訳

第1回：4月24日 35名

（小学校13校、中学校1校、小中一貫校1校、 合計15校）

4月25日 14名

（小学校6校、中学校8校 合計14校）

第2回：5月6日 4名

（小学校1校、中学校3校 合計 4校）

5月7日 26名

（小学校7校、中学校2校 合計 9校）

3. 企画運営のポイント

- (1) 利用説明では、活動計画書や食事申込書など、提出書類の書き方を丁寧に説明することでスムーズな施設利用につなげる。施設利用では、YouTube動画を活用して利用団体が活動内容をイメージできるようにする。
- (2) 参加者を2グループに分け、事前打ち合わせと施設見学を同時に進行することで、事前打ち合わせの時間を多く確保できるようにする。
- (3) 施設見学では、所内を実際に歩き、使用方法やコロナ対応などのポイントを具体的に伝える。
- (4) 活動体験では、利用の多い野外炊事の火起こし体験と、キャンプファイヤーとキャンドルファイヤーの準備と片づけを行い、安全管理の点を踏まえた体験をする。
- (5) 昼食は食堂での食事をすることで、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた食事の仕方を実践していただき、当日の活動に生かせるようにする。

4. 日程

午前	午後
開会行事 施設利用説明 施設見学 事前打ち合わせ	昼食 施設見学 事前打ち合わせ 火起こし体験 キャンプファイヤー、 キャンドルファイヤー準備、片づけ 質疑、応答

5. 主な活動内容



「開会行事」



「主催者挨拶」



「施設利用説明」



「施設案内」



「火起こし体験」



「事前打ち合わせ」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

①第1回（49名）

満足41名（84%） やや満足8名（16%） やや不満0名 不満0名

②第2回（30名）

満足27名（90%） やや満足3名（10%） やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・施設等の理解のみでなく子供たちへの指導の部分までわかる説明会でした。
- ・個別に事前打ち合わせの時間が設けられていたのがよかったです。
- ・素早く活動できるよう事前の準備や片付けをしてくださってありがたかったです。
- ・一つひとつ丁寧に教えていただき、わからなかったことがわかったり具体的にイメージしたりすることができてよかったです。実際に体験できたことを子供たちの指導に生かしたいです。

(3) 成果

- ①施設利用の説明では、事前打ち合わせやプログラム相談で質問の多い、新型コロナウイルス感染症対策の取組や提出書類（活動計画書や食事申込書など）の書き方などを始めに説明することで、参加者にとってわかりやすい説明会となるような工夫ができた。
- ②施設見学と事前打ち合わせを午前と午後のグループに分けることで、学校団体ごとに個別の事前打ち合わせの時間を十分に確保することができた。
- ③プログラム体験では、「野外炊事」「キャンプファイヤー」の薪の組み方や火起こしの仕方について行うことで、団体からの問い合わせや質問事項の多いプログラム体験をしてもらうことができた。また、けがや事故の多いポイントなども説明することで安全管理の意識を高めることができた。
- ④休日と平日の開催をすることで、学校行事や予定に合わせた開催をすることで、参加しやすい日程調整を行うことができた。

(4) 課題

- ①事前打ち合わせや、提出書類の書き方などの説明がメインとなったため、「登山プログラムを体験できるとよかった。」という要望もあった。下見を勧めたり、登山についての説明の時間を充実させたりするなどの工夫も必要である。
- ②新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、行事の縮小やキャンセルが相次ぎ、引率の職員自身がプログラムの体験不足という事態が増えた。説明会も行いつつ、同時に各団体への個別相談や事前打ち合わせを充実するなどの実態に応じたフォローも必要である。

担当：主任企画指導専門職 渡邊 秀幸

「第3回利用団体のための説明会」

1. 趣 旨

国立赤城青少年交流の家を利用する団体の引率者が、施設の利用方法や各活動プログラムの内容を理解するとともに、実際にプログラムの一部を体験する。

2. 事業の概要

(1) 期 日

第3回：令和4年8月26日（金）、27日（土）

(2) 参加者

①参加対象

第3回：令和4年度利用団体（9～11月）の引率者

②参加人数と内訳

8月26日（金） 14名

（小学校1校、中学校7校 合計8校）

8月27日（土） 7名

（小学校1校、中学校3校 合計4校）

3. 企画運営のポイント

- (1) 利用説明では、活動計画書や食事申込書など、提出書類の書き方を丁寧に説明することでスムーズな施設利用につなげる。施設利用では、YouTube 動画を活用して利用団体が活動内容をイメージできるようにする。
- (2) 参加者を2グループに分け、事前打ち合わせと施設見学を同時に進行することで、事前打ち合わせの時間を多く確保できるようにする。
- (3) 施設見学では、所内を実際に歩き、使用方法や新型コロナウイルス感染症対策などのポイントを具体的に伝える。
- (4) 活動体験では、利用の多い野外炊事の火起こし体験と、キャンプファイヤーとキャンドルファイヤーの準備と片づけを行い、安全管理の点を踏まえた体験をする。
- (5) 昼食は食堂での食事をするすることで、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた食事の仕方を実践していただき、当日の活動に生かせるようにする。

4. 日 程

午 前	午 後
開会行事 施設利用説明 施設見学 事前打ち合わせ	昼食 施設見学 事前打ち合わせ 火起こし体験 キャンプファイヤー、 キャンドルファイヤー準備、片づけ 質疑応答

5. 主な活動内容



「開会行事」



「施設利用説明」



「施設見学」



「薪の組み方説明」



「火起こし体験」



「事前打ち合わせ」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足18名(86%) やや満足3名(14%) やや不満0名 不満0名

(2) 参加者の声

- ・食堂で食事がとれたこともよかったです。
- ・林間学校実施日が近い日に説明会があったため、具体的なイメージを持つことができました。
- ・個別の打合せでは、細かなところまで相談にのっていただき、活動が具体的にイメージすることができました。
- ・火起こしやキャンプファイヤーの準備などの体験ができてよかったです。
- ・遠方からの参加だったので、前泊できるとよかったです。
- ・2回目の参加でしたが、柔軟に対応していただきました。(意見多数)

(3) 成果

- ①施設利用の説明では、事前打合せやプログラム相談で質問の多い、新型コロナウイルス感染症対策の取組や提出書類(活動計画書や食事申込書など)の書き方などを始めに説明をすることで、参加者にとってわかりやすい説明会となるような工夫ができた。
- ②施設見学と事前打ち合わせを午前と午後のグループに分けることで、学校団体ごとに個別の事前打ち合わせの時間を十分に確保することができた。
- ③事前打ち合わせでは、利用団体毎に当日の活動に即した質問事項やプログラム相談などに個別に対応することができた。

(4) 課題

- ①今年度は、事前打ち合わせや、提出書類の書き方などの説明がメインとなったため、「登山プログラムを体験できるとよかった」という要望もあった。予算の都合もあるので、下見を勧めたり、登山についての説明の時間を充実させたりするなどの工夫も必要である。
- ②今回の参加者は遠方からの参加者が多く、「前泊できるとよい」という声があった。来年度は申し込み時のチェック欄に「前泊または後泊希望」欄を設ける必要がある。

担当：主任企画指導専門職 渡邊 秀幸

5 地域ぐるみで「体験の風を起こそう」運動推進事業

「さくらフェスタ」

1. 趣 旨

富士見地区をはじめ前橋市及び周辺地域の人々に施設を開放し、当施設の年度のスタートを知らせる。体験活動の意義や重要性を深めるために、施設内で咲いている桜の観賞や体験活動を提供する。

2. 事業の概要（期日と参加者）

	内容	期日	参加人数
1	オープニングセレモニー ササビーとのふれあいタイム 赤城山スタンプラリー	4月2日	81名
2	赤城山スタンプラリー	4月3日～8日	94名
	合 計	7日間	175名

3. 企画運営のポイント

第1駐車場前、旧守衛所に受付を設けて、消毒や検温を用意し、新型コロナウイルス感染症対策を行い、体験活動を提供する。

4. 事業の様子



「新型コロナウイルス感染症対策」



「市立前橋高校吹奏楽部演奏」



「ササビーとの記念撮影」

5. 成果と課題

(1) 成 果

- ①事前の体調確認と検温、消毒を受付で行い、感染症対策に配慮して実施できた。
- ②市立前橋高校吹奏楽部の演奏は工夫した内容であったため、参加者が演奏を楽しめた。

(2) 課 題

- ①赤城山スタンプラリーのチェックポイント配置箇所は、一方通行で行けるようにするなど、安全面の改善を図る。
- ②雨天時等は受付場所を事務室前にし、そのことをチラシにも掲載する。

担当：主任企画指導専門職 渡邊 秀幸

「群馬県からっ風「体験の風をおこそう」運動推進事業」

1. 趣 旨

群馬県における子供たちの体験活動を推進するとともに、「体験の風をおこそう」運動を広く普及することを目的として、群馬県教育委員会及び学校教育関係者並びに青少年団体による実行委員会を組織し、実行委員の団体及び関係する団体と連携しながら体験活動の場を提供する。

2. 事業の概要（期日と参加者）

	参加事業名	期日	参加人数	会場
1	鬼ごっこチャンピオンシップ	5/22	210	国立赤城青少年交流の家
2	AKAGI PIG-OUT CAMP	5/28、29	1,862	千本桜の森公園
3	ぐんだいで遊ぼう	8/7	100	群馬大学理工学部
4	子どもゆめ基金説明会	9/20	13	前橋プラザ元気2 1
5	富士見産業祭	11/3	353	富士見公民館
6	群馬県市町村説明会	11/9	3	国立赤城青少年交流の家
7	からっ風体験フェスティバル	2/12	217	けやきウォーク
	合 計		2,758	

3. 企画運営のポイント

新型コロナウイルス感染症の国や群馬県の動向を考慮しながら、可能な限り、体験活動の機会と場の提供に努める。

4. 事業の様子



「鬼ごっこチャンピオンシップ」



「子どもゆめ基金説明会」



「からっ風体験フェスティバル」

5. 成果と課題

(1) 成 果

新しく加盟した構成団体との共催事業を通して、新たな参加者層に対し、「体験の風をおこそう」運動の普及・啓発を図ることができた。

(2) 課 題

新型コロナウイルス感染症の対策を行いながら、引き続き、県内の多くの子供たちに体験活動の機会と場を提供していきたい。

担当 主幹兼事業推進係長 福岡 公平

「あかぎフェスタ2022」

1. 趣 旨

「体験の風をおこそう」運動を広く普及することを目的に実施する。
また、小学生・幼児等の親子を対象に子供たちの成長に様々な体験活動が大切であることと基本的な生活習慣の重要性について発信する機会とする。

2. 事業の概要

(1) 期 日 令和4年10月22日(土)～10月23日(日)(1泊2日)

(2) 参加者

- ①参加対象 幼児・小学生等を含む家族・親子
- ②参加人数 宿泊144名(47家族) 日帰り 37名(11家族)
- ③参加者内訳 宿泊 保護者69名、中学生5名、小学生53名、幼児14名、
3歳未満児3名
日帰り 保護者16名、小学生15名、幼児6名

3. 企画運営のポイント

- (1) 群馬県から「体験の風をおこそう」運動実行委員会構成団体と連携して企画・実施する教育事業として位置づける。
- (2) 家族、特に子供たちに、多様な遊び、体験の機会と場を提供するとともに、家族でゆっくりと楽しい時間を過ごす1泊2日の宿泊を伴う事業とする。
- (3) 「体験の風をおこそう」運動応援団の池谷直樹氏を招聘し、体操パフォーマンスや体操教室を実施する。
- (4) 法人ボランティアが、これまで培った知識・技能・経験を活かして、参加者が楽しめるように自主企画し運営するブースを設け、より実践的な力を養う機会とする。

4. 日 程

	午 前	午 後	夜
10月 22日 (土)	/	<ul style="list-style-type: none"> ○開会式 ○夕食 	<ul style="list-style-type: none"> ○池谷直樹氏の体操パフォーマンス ○「早寝早起き朝ごはん」読み聞かせ ○入浴 ○就寝
10月 23日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> ○朝食 ○オープニング ○体験活動ブース① (15出展) ○体操教室② 	<ul style="list-style-type: none"> ○昼食 (市立前橋高校吹奏楽部演奏) ○体験活動ブース② ○体操教室② ○クロージング 	/

5. 主な活動内容



「開会式」



「体操教室」



「体操パフォーマンス」



「絵本読み聞かせ」



「体験活動ブース」



「市立前橋高校吹奏楽部演奏」

6. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

満足 41家族 (87.2%) やや満足 6家族 (12.8%) やや不満 0家族 不満 0家族

(2) 参加者の声

- ・ 普段できない貴重な体験をさせていただき、子供たちの心身の成長を感じ取ることが出来る有難い時間でした。
- ・ 家で過ごす時間ばかりでしたが、外の空気、人々に触れて、いろいろな体験が出来たこと自体がとても良かったです。
- ・ 池谷さんのパフォーマンスが圧巻でした。ポニー乗馬体験では、動物と触れ合うことが普段無いので、貴重な体験となりました。
- ・ どの体験ブースも面白く、創作活動ブースでは、いろいろな自然素材に触れることが出来たのが良かったです。

(3) 成果

- ①赤城青少年交流の家が主催となり、実行委員会構成団体9団体に加え、群馬高専等、新たにブース出展協力団体を得られ、様々な団体と連携して取り組むことができた。
- ②池谷直樹氏のパフォーマンスや体操教室(2回:49名参加)が好評で、宿泊参加者は募集人数を超えた申込数となった。次年度も引き続き池谷氏の招聘をしていきたい。
- ③コロナ渦により、事前申し込み制の宿泊者50家族と日帰り参加者家族の実施とすることで、密を避ける環境と、時間的にもゆとりをもった体験活動を提供することができ、満足度の向上につなげることができた。

(4) 課題

- ①宿泊参加者はすぐに定員に達した一方で、日帰り参加者の集客は11家族37名にとどまった。次年度以降も、新型コロナウイルス感染症対策を講じるとともに、体験活動内容のさらなる充実、申込方法等の検討をする必要がある。

担当：主任企画指導専門職 渡邊 秀幸
主幹兼事業推進係長 福岡 公平

6 その他

「地域との合同防災訓練」

1. 趣 旨

「前橋市地域防災計画」に基づき、地域との防災訓練を通して、地域との連携協力を促進する。さらに、災害時における安全な避難方法や必要とされる防災グッズの内容について学び、防災・減災を担う拠点としての役割を地域住民に理解していただくとともに、職員の受け入れ態勢の確認を行う。

2. 事業の概要

	午 前	午 後
11月 23日 (金)	・避難訓練(防災グッズ確認及び避難所への移動) ・災害体験訓練(消火器訓練)	・昼食、解散

3. 企画運営のポイント

避難訓練時に、防災グッズを持参し、前橋市総務部防災危機管理課防災アドバイザーからアドバイスをいただくことにより、防災意識の向上を図る。また、避難した参加者全員に消火器訓練をすることで、火災発生時に適切に消火器を使用できるよう、実践的な訓練を行う。

4. 事業の様子



「避難訓練」



「防災グッズ確認」



「消火器訓練」

5. 成果と課題

(1) 成 果

- ①避難時に持参する防災グッズについて、前橋市総務部防災危機管理課防災アドバイザーからアドバイスをいただいたことにより、地域住民の防災意識が向上した。
- ②地域住民の避難訓練を毎年行ってきたことで、当施設に避難する意識の定着が図られてきた。

(2) 課 題

- ①避難所開設後、地域住民を受け入れる際に、住民の体調や状況に応じた柔軟な対応ができるように次年度の訓練に生かす。

担当：管理係主任 白石 崇尋

令和4年度 国立赤城青少年交流の家職員

所	長	松村純子
次	長	齊藤裕徳
主任企画指導専門職		渡邊秀幸
企画指導専門職		竹内正則
企画指導専門職		小林大輔
企画指導専門職		杉山直弥
企画指導専門職		中山太平
主幹兼事業推進係長		福岡公平
事業推進係		小林久瑠美
事業推進係		小野北斗
事業推進係		阿佐美幸子
事業推進係		吉田賢
事業推進係		小沼朋暉
事業推進係		高田真美
事業推進係		寺田里美
総務係	長	逸見博俊
総務係		鈴木和子
総務係		松井莉乃羽
管理係	長	長谷川敦子
管理係		白石崇尋
管理係		佐藤順彦
管理係		新藤祐司
学生サポーター		細田希星